

September 10, 2008

ムシャラフ前大統領は一つの歴史

(Musharraf is History)

多くの顔を持つ

前大統領は多事多難に挑む国家から姿を消した。反大統領連合は既に軋み始め、

経済は急落中、過激派勢力は膨張中

Musharraf 将軍の引退がパキスタン政界に巢食う欠陥を焙り出す

権力の座から降りた **Pervez Musharraf** は綿シャツを纏って、ラワルピンディの大統領ロ
ッジを 8 月 20 日に訪れた来客とテニスに興じていた。それは軍恩給受給者そのものだった。
その 2 日前、大統領将軍 (retired) **Musharraf** はパキスタンの最高権力者だったと彼は信
じていたのだが、過去 9 年間に多くの事柄を為した人物は歴史になってしまった。

彼は、中枢にいた日々は終わったのだと言うことを受入れてるようで、友人に「今は、隠
遁して政争に巻き込まれたくない」と語っている。8 月 18 日午後、彼が国営テレビで引退
を発表するまで、彼がタオルを投げるとは殆どの人が信じなかった。1999 年の無血軍事ク
ーデターで権力を掌握して以来、彼は幾多の政治的困難と暗殺計画を潜り抜けてきた人物
である。彼は猫のように九つの命を持つと自慢してきたが一多分それ以上の命、今年二月
の総選挙で反対派が怒涛の復活をして以来、この自慢話は終わった。

彼はこのことを理解しようとはせず、状況好転まで何とか権力維持出来るだろうと考えた。
過去 2 ヶ月、権力は彼の足元から明らかに消滅していた。にも拘らず議会多数派野党連合
が大統領弾劾を決定した時でも、国会が反大統領の動きをすれば大統領権限で国会解散な
ど、彼が何らかの対応策を採るだろうと多くの人々が信じた。激しい闘争を予想していた
ムシャラフの宿敵 **Nawaz Sharif** は「最悪に備えていたが、ムシャラフは静かに引き下が
ったので驚いた」と述べている。

Musharraf が穏やかに引退の理由

彼は辞表提出の前夜 勝負は終わったと結論し夫人、子供達、母親に密かに伝え、その翌日、
演説に先立つコーラン暗誦部分で彼の決心を示唆した。「地上での栄華を望まず争いを望ま
ない者には天国の楽園がある」とパキスタンの国家的演説史でも稀なほど、注意深い表現
で為され、彼の諸業績を挙げて弾劾免訴を訴えて「重大な国益の為に」大統領を辞任する
と 45 分間の演説を締めくくった。

ムシャラフが支えた与党、**Pakistan Muslim League(Q)** が 2 月の総選挙で権力の座から転
落した後、彼が気品のある引退をしていたら彼のイメージも若干良かっただろう。彼にと
って悔しいことは、彼が権力を握った時に告発した **Benazir Bhutto** の夫 **Asif Zardari** に率

いられる Pakistan Peoples Party(PPP)と Nawaz Sharif の Pakistan Muslim League(N) が選挙の勝者であったことである。然しながら、戒厳令を布告して昨年 1 月 3 日にムシャラフが解任した裁判官の再登用に関し PPP、PML(N)の両党間に意見の相違点が持ち上がった。

裁判官問題、法の支配、は反ムシャラフ運動が結束した焦点であり、政治家どもが相乗りしたものだが、選挙後には ザルダリと シャリフの支配権争いの名目に化した。Nawaz Sharif を 1999 年に追放して、サウジの Jeddah に不名誉な 7 年間も亡命させたムシャラフに対して、シャリフは借りを返えそうとしていた。ムシャラフは最高権威者（大統領）の立場から法廷決議を無視していたのだが、解任された判事達を復帰させれば、ムシャラフが大統領として留まるべく行なった 2007 年選挙は無効と判事達は最高裁に宣告させるだろうシャリフは読んでいた。

PPP, 特にザルダリは、解任された最高裁長官 Iftikhar Chaudhary は法曹関係者を煽る抵抗源になっていたのもので、その復権には慎重だった。ムシャラフが布告した国家和解法(NRO-National Reconciliation Ordinance)で Zardari と Bhutto の刑事罪は免罪になっていたが、復権すれば Chaudhary 前長官は NRO を廃するだろう と言うことがザルダリの関心事であった。事実、解任前に前長官はそのことを何がしか示唆していた。加えて、11 年間の監獄生活中にザルダリが提出した請願に対する司法の対応絡みで、ザルダリは司法に対して不満を抱いていた。最高裁判事任命を国会が監視出来るようにしたいと言う彼の 大改革に比べれば、Chaudhary 前長官の復職など些細なこととして無視した。斯様に、Zardari と Musharraf は Chaudhary 前長官復職に関しては同じ立場であった。

ザルダリが躊躇した時、シャリフは前最高裁長官を復職させるまで PML(N)出身閣僚は戻らない、と引揚げさせた。国家統治が損なわれ、経済状況下降だと、PPP が世論から糾弾されかねないとザルダリは感じ取っていた。悪いことに、Musharraf が PPP 内部の異分子と通じてザルダリの立場を揺るがそうとし、与党連合政府の運営を厳しく咎め始めたので、ザルダリはムシャラフ排除は不可欠と判断し、ムシャラフが大きな影響力を保持していた軍との妥協がムシャラフ退陣だった。軍最高司令官 Ashfaq Kayani 将軍は、軍は長い間十分にムシャラフを支えてきたし、今後政治的中立を回復する、と示唆している。又、米国もムシャラフが問題であることを理解し、ムシャラフ排除に反対しなかった。

与党連合に歪み

軍及び米国の内諾取得後、ザルダリはムシャラフ排除を決意し、8 月 5 日イスラマバードでシャリフと会談した。ザルダリはシャリフに、先ずムシャラフ大統領を排除しそれから前最高裁長官を復職させると提案してシャリフを驚かせた。シャリフによると、「前最高裁長官の復職には大統領が邪魔であるから、先ず大統領を退陣させよう」とザルダリは述べた由。

シャリフは同意し、ムシャラフ大統領退陣後「直ちに」前長官を復職させると言う書面をザルダリから取り付けた。この時が、大統領告発書でムシャラフを弾劾すると決定した瞬間である。

ムシャラフが引退を拒否した場合、大統領弾劾には上院・下院で議席の三分の二以上を必要とするが、与党連合政府は弾劾できるとザルダリは踏んでいたようである。然しながら、誰も一強力な軍はとりわけ一国家の政治的経済的不安を増幅し長期に亘り社会問題と化すであろう弾劾手続を歓迎しなかった。前軍最高司令官が泥にまみれるのは軍としては歓迎せざるものだった。結局、ムシャラフの長年の支援者一軍、米国、英国、サウディ・アラビアが、ある種の保証付、且つパキスタンで初めて栄誉を保ったまま引退する軍指導者として認めることで、手打ちとムシャラフを説得したようである。

然しながら、反ムシャラフの政治世論からの逆りは未熟なようである。パキスタンが直面する諸問題に対しムシャラフ引退が万能薬ではなく、むしろ前大統領が厳しく挑んでいた諸問題を未完のまま残していった。苦痛招来に関し国民のコンセンサスが必要な当該諸問題について与党連合政権は既に揺れている。どちらかと言えば、ムシャラフ退陣はパキスタン政局の真の欠陥を厳しく焙り出している。

諸問題の一部は、PPPの実権者、決定権者が議席のないザルダリであり、首相はその履行者に留まっていることである。与党連合に関する限り、コメンテーターがいみじくも「無責任に権力を楽しんでいる」と評したシャリフの裏表のある行動をPPPの多くが大きな問題と視ている。シャリフのPML(N)は、閣内に地位を占め政府への協力を標榜しながらも、政府の厳しい諸決定から常に遊離行動をしてきている。

ムシャラフが去った今、覇権争いがザルダリとシャリフの間で始まった。ムシャラフ退陣後「直ちに *immediately after*」長官復職の約束をザルダリは守るべしとシャリフは主張し両者の口論が始まった。ザルダリはPPP指名者を大統領にすべく時間稼ぎをした。軍との約束の一部としてムシャラフに対する免責の件で多くの圧力を受けたとザルダリはシャリフを非難している。

円滑なムシャラフ退陣で、ザルダリが第一ラウンドを勝ったようだが、司法の最高峰である長官を復職させることができれば、シャリフの明らかな勝利になるだろう。戦術は練り直されつつある。ザルダリは倒すべき相手はシャリフと認識しており、早期選挙回避にあらゆる手を打つだろう。シャリフはある時期での総選挙を望んでいるようだが、Talat Masood 退役中將は「シャリフはご都合主義者と言われているので、直ぐに引き金を引くことはしないだろう」と述べている。

両者の間ですでに温容さは消えている。シャリフはザルダリに約束を守らせるのは難しい

と友人に漏らしている。長年の政治評論家で現在 PML(Q) 事務局長を務めている Mushahid Hussain は、「両者間の緊張の高まりで夫々が独自のやり方でやるべきことを沢山抱えている。シャリフは物事成就を待てない、攻撃するクリケット選手のような、ラホール都会子。対するは、生き残るには忍耐を要する Sindh 砂漠地域からの人物で、大声で喋りまくり交渉を長引かせてシャリフを怒らせる」と考えている。ザルダリを知る人は、彼は追い詰められると難問を返すやり方をする御仁だと言っている。

当面、政局への最大課題は、昨年法曹と世論の反ムシャラフ運動勃発以来下降しているパキスタン経済である。総選挙後半年、政府は何の手立ても講じて来なかったので、ムシャラフが自分の大きな功績の一つと自負していた経済は今や錐揉み下降中。

160 億ドルあった外貨備蓄も 90 億ドルを切り、対外貿易赤字は 200 億ドルに達しようとしている。国家財政赤字は GDP の約 5% で、パキスタン・ルピーはこの 2-3 ヶ月で 10% 以上下落している。空前の電力不足と基本資材の価格高騰で産業は大打撃を蒙っており、2001 年後にリスケジュールされたパキスタンの海外借款の満期到達額が増加で外貨債務率上昇という暗い見通しである。パキスタンの一般庶民にとっての最大関心事は過去 12 ヶ月で 25% 上昇したインフレであり、食料・輸送の分野では大凡 35% 上昇した。

パキスタンは西側諸国とインドーから対テロ対策強化を要求され、部族管轄地域であるパキスタン西北部に於ける過激派に対する軍部の締付が国民の不評増に直面している。アフガニスタンに接するこの地域での軍事活動継続は何十万人もの流民と数百人の怪我人を生み出している。然しながら、タリバン化の潮流と過激派の暴力一国中での自爆攻撃を含む一は国家組織を引裂く脅威になっている。

インドの懸念

交戦状態で大きな被害を受けているパキスタン陸軍に目を向けると、軍最高司令官 Kayani は政治的指導者の命令を単に履行するのではなく、寧ろムシャラフ時代と同様に米国の要請に配慮する人物と見える。然しながら、同時に軍の利益擁護にも留意している。

西側諸国の利益の面からの要請と地元の協力、例えばアフガニスタン政権、そしてまたインドの協力、で国際的ゲームは規模縮小してると言う見方がパキスタン軍部内で有力になりつつある。特に、鉱物とガス資源が豊かな Balochistan での紛争はインドとアフガンの Secret services に煽られ資金援助されていると確信している。

インドに対し、パキスタンの新政権は両国関係の変化を約した。ザルダリは「大いなる和解」「パキスタンはインドの増幅器」と口にしたが、5 ヶ月後「緊張状態—under stress」とインド外務次官 Shivshankar Menon が指摘している。カブールのインド大使館テロ攻撃、バンガロールとアーメダバッドの爆弾事件はパキスタンの使嗾とインドは読んでいる。

数年来沈静化していた LOC(実効国境-Line of Control)は、突然 4 月来両国軍が 24 回銃火を交えている。国境での対印攻撃増はアフガン国境に軍備増強を要請する米国の圧力を排するパキスタン軍の常套手段とインドの分析家は読んでいる。又、対外方針のコントロールにパキスタン軍は密かに再関与しているようだ。マン・モハン政府のテロとパキスタンについての弱腰に対する非難が湧き上っており短期間に友好回復は難しい。別のインド人分析家は「パキスタンは嘗ての姑息なやり方に戻っている」と評している。昔との違いは、独裁者が居なくなったとは誰も思わないが、最早ムシャラフがパンチング・バッグでは無いことである。

India Today 2008 年 9 月 1 日号記事
インド・アジア邦訳